慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	虚構の言語、絶対的な言葉 : マラルメ『英単語』にみる言語観
Sub Title	La langue fictive et le Verbe absolu Vues mallarméennes sur la langue aux Mots anglais
Author	大出, 敦(Ode, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.60 (2015. 3) ,p.65- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Suzuki Junji et au professeur Hayashi Emiko = 鈴木順二教授・ 林栄美子教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20150331-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

虚構の言語、絶対的な言葉

マラルメ『英単語』にみる言語観

大　出　　敦

I　『英単語』とは何か

周知のように『英単語』は、『古代の神々』と並んで教育用教材としてステファヌ・マラルメが編んだものである。この作品についてはマラルメが後にポール・ヴェルレーヌに請われて書き送った通称自叙伝と呼ばれる書簡で「僕は、手許不如意の時やひどく金のかかるボートを買うために、文字通りつらい仕事をしなければなりませんでした。ですがこれはそれだけのことですし（『古代の神々』や『英単語』のことです）、語るに及ばないものです」[1] と書いていることから、マラルメ研究ではあまり重要視されてこなかった一面がある。しかしすでにポール・ヴァレリーが、『英単語』は「おそらくわれわれが知りうるマラルメの内的仕事のうちでもっともその内面を明らかにしている資料ではないだろうか」[2] と述べているように、マラルメの言語観が最も露呈したものといえる。われわれはこのヴァレリーの言葉を支えに英語の教材でもあるこのテクストを過大に評価するのでも、必要以上に矮小化するのでもなく、マラルメの言語観の形成中でどのような位置を占

1）Stéphane Mallarmé: *Œuvres complètes* I, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1998, p. 789（以下 *O.C.* I と略す）.

2）Paul Valéry: « Sorte de préface » in Stéphane Mallarmé : *Thèmes anglais*, Gallimard, 1937, p. 17.

めているのかを見ていくことにしよう。

マラルメが『英単語』をいつ企画したのか、あるいはどのような経緯でマラルメのもとに出版の話が舞い込んだのかといった伝記的な事実を確定することはこの際措くとしよう。確認しておきたいのは、この学習書の執筆が1875年にはすでに着手され、刊行されたのが1877年であることだ[3)]。そしてこれまでの多くの論は『英単語』が当時の言語学、すなわち比較文法の成果を反映しているという前提に立っている。確かに次のような一節に出会ったとき、われわれは歴史文法とも呼ばれる比較文法の第二世代に属するアウグスト・シュライヒャーの唱えた言語の進化論を思い起こすだろう。

> アーリア諸語、セム諸語、ウラル＝アルタイ諸語というのは創世記に基づく「言語」の分類であるが、これとは別により直接的に語の形態の発展そのものの段階をモデルにした分類をすると次のようになるだろう。中国語のような「単音節」で、確かに原始的な遺構。次いで「膠着語」、あるいは合成語のうちでも二つの語を併置して合成し、またはほとんど変化はしないものの、接辞を語の本体に併置するような結合。最後に「屈折」、さもなくば縮約による語中、語末の何らかの文字の消失や格の屈折語尾の消失[4)]。

確かに大きな枠組みでは『英単語』は比較文法のなかに位置づけられる。し

3）マラルメは妻のマリアに「例の『文献学』にはあと一日分作業が残っている。トゥルシーも納得してくれたし、［……］100フラン先払いしてもらえた」(Stéphane Mallarmé: *Correspondance* IV–2, recueillies, classées et annotées par Henri Mondor et Lloyd James Austin, Gallimard, p. 404) と1875年8月20日ないしは21日付の書簡で言及しているので、少なくとも1875年には『英単語』の執筆はかなりの程度まで進んでいたことをこの書簡はうかがわせる。なおトゥルシーは『英単語』を出版した出版社。

4）Stéphane Mallarmé: *Œuvres complètes* II, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, p. 1099（以下 *O.C.* II と略す）.

かしその一方で、ポール・クローデルからジェラール・ジュネットにいたるまで多くの研究者、文学者が問題にする第1巻の子音の意味が、比較文法とは根本的に相反するクラテュロス主義の文脈に位置づけた方が座りがよいこともわれわれは承知している。むしろマラルメは比較文法の枠組みを一旦、提示しておいて学問的な正統性を担保しておく一方、それをあっさりと突き抜けて進んでいってしまっているといった方がよいかもしれない。その飛躍の梃子となっているのが「文学的視点」である。

> 現代の言語学の原理の厳密な遵守は、われわれが「文学的視点」と呼ぶもの、あるいはひとたび洗練された言語の視点に譲歩するだろう[5]。

マラルメはわざわざ序論の第2章で「文献学」という章まで設けて、言語学的な見地からの説明をしているにもかかわらず、いともたやすく言語の研究は「現代の言語学の原理」よりも「文学的視点」に席を譲ることになるといってしまう。マラルメは言語学の成果と法則を、と唱えながらも、それを傍らにおいて文学的な視点を導入していくのである。しかしマラルメ自身がアルファベットの意味を展開するに先立って、言語学の原理というよりも文学的視点に基づいたものに優位を、などといってしまったがゆえに、多くの論者がこのリストをマラルメの空想の産物、詩人の妄想ととらえてしまった側面は否定できない。だがマラルメがいう「文学的視点」が何を表しているかをマラルメに沿って見直す必要があるだろう。そのためにもまず『英単語』の概要を見ておこう。

『英単語』の冒頭でまずマラルメが問いかけるのは「英語とは何か」という根本的な問いである。この点に関してはジュネットをはじめとして多くの識者が口を揃えて言っているように「語彙」であるということで間違いがない。少なくともマラルメの構想ではこの英語の学習書は「『語彙論』」と「『文法学』、すなわち言語の形式的な研究」[6] の二つの部分からなることに

5）*ibid.*, p. 967.
6）*ibid.*

なっていた。しかし『英単語』と対をなすはずであった英語の文法篇は、予告されながら遂に刊行されることはなかった。理由は不明だが、それを詮索しても意味はないだろう。結果として「もしみなさんがこの文献学の本のタイトルを覚えていたなら、『文法』を忘れ、『語彙』のことしか考えないようにするのがふさわしい」[7] とする、もっぱら英語の単語が対象となったこの本だけがわれわれに残されたことになる。

こうしてマラルメは「英語とは何か」という問いにここでは「英語とは英語の語彙である」と答え、対象を語に限定し、次いで英語の変遷を概観していく。まずマラルメは英語の古層には「二つの要素」があることを指摘する[8]。一つはもともとイングランドで話されていた「アングロ＝サクソン語」の要素であり、もう一つは「1066 年、ギョーム征服王に率いられたノルマン人によるイングランドの征服の結果」もたらされることになった「フランス語」、すなわちノルマン語の要素である[9]。そしてこの「二つの合金の融解の後で初めて」[10] 英語が成立するのである。しかしマラルメはこれを簡単に「融解」と表現してしまっているが、実際にはそれはノルマン語とアングロ＝サクソン語の「闘い」[11] であったことも指摘している。長い闘いの末、二つの要素は「城館や農村で融合する」[12] のである。しかしこの「融合」も一気に進んだわけではなく、イングランドでは長らく言語の並立状態が続くことになる。英語の「すべての語は palace（宮殿）や castele（城）といっ

7）*ibid*, p. 958.

8）これ以降のマラルメの英語の成立に関する歴史的記述はジョン・アールの『英語文献学』（John Earle: *The Philology of the English tongue*, The Clarendon Press, 1871）によるものである。ここでマラルメは『古代の神々』でコックスの文章をパッチワーク的に切り貼りした技法を再び用いている。このジョン・アールとマラルメの対応関係はジャック・ミションの『マラルメと「英単語」』で紹介されている（Jacques Michon: *Mallarmé et les* Mots anglais, Les Presses de l'Université de Monrtéal, Canada, 1978, pp. 167–186）。

9）*O.C.* II, p. 951.

10）*ibid.,* p. 952.

11）*ibid.,* p. 958.

12）*ibid.*

たノルマン語のような高位公職、政治、狩り、要するに領主の生活に関わるものと、それ以外の卑しく身近なもの、例えば二つとも家庭を表す home と hearth、すなわちアングロ＝サクソン語に関わるもの」[13] と二種類の語彙が併存するのである。英語にはこうした二重状態が「現代まで並行的なまま残った語彙」[14] を見ることができるとして、マラルメは「城主の食卓に供されのはbeef、農民が市場に連れてくるようなものはox」[15] などと例を挙げていく。結局、長い間、支配階級では新たな支配者となったノルマンディー公の言語であるノルマン語が話され、被支配階級では依然として昔ながらのアングロ＝サクソン語が話されていたのである。ところでマラルメによれば、この言語の二重状態は 1066 年のギョーム征服王によるイングランドの征服から 1250 年のチョーサーの『カンタベリー物語』までが顕著な時期である。そしてマラルメは「キングズ・イングリッシュを創始した」チョーサーにおいてこの「英語―仏語の二重状態」が「はっきりとした形をとって現れ」[16]、それが一種の美学へと昇華していると賞賛する。マラルメはチェサーがアングロ＝サクソン語由来の単語とノルマン語由来の単語を併記し、それが独特のリズムを生み出している例を列挙する。たとえば「act and deed、head and chief、mirth and jollity、steedes and palfreys」[17] と。そして「そこから近代英詩の最も洗練された文体の形式の一つが生じる、すなわち二つの形容詞のあいだに名詞を置くことである」[18] として、チョーサーの『カンタベリー物語』一節「I say the woful day fatal is come」[19] を引用する。このよう

13）*ibid.*
14）*ibid.*
15）*ibid*
16）*ibid.,* p. 960.
17）*ibid.*
18）*ibid*. これらはいずれもチョーサーの詩作品からの引用である。Act and deed は *Chaucer's Dreame*、mirth and jollity と steedes and palfreys は *Canterbury Tales* からである。そしてこれらの引用は John Earle: *The Philology of the English tongue* (1871, The Clarendon Press), p. 84 に見られる。
19）*ibid.* この引用文は『英単語』では「I say the woful day fatal come」と記されているが、マルシャルが指摘するように「I say the woful day fatal is

に英語の成り立ちからマラルメはアングロ＝サクソン語とノルマン語とが並立している状態を浮き彫りにする。そして二つの要素が融合して成立する言語にラテン語の語彙などが加わり、現代英語となっていく歴史がその後に叙述される。マラルメは「英語とは何か」を問い、文献学の方法を提示し、英語の歴史を概略して、次のことを抽出する。すなわち英語はアングロ＝サクソン語とノルマン語（フランス語）から基礎が形成され、そこに外国語の要素が加わったと。

これに続く3巻の記述は、第1巻「アングロ＝サクソン語」、第2巻「フランス語」第3巻「外国語」と、それぞれ英語を構成する要素について詳述しているが、マラルメは英語の大きな基本要素であるアングロ＝サクソン語、すなわちゴート語に特権的な地位を与え、分量的にも多くをさいている。この第1巻で分析されているアングロ＝サクソン語の成り立ちを子細に見ていくと、この要素自体も一様なものではなく、いくつかの階層があることが分かる。マラルメはアングロ＝サクソン語に分類できるものには「単純語」と「複合語」があり、その中間に「接辞」があるとしている。最も古い形態として「単純語」があり、それに接辞がついて、新たな語が形成され、さらに単純語と単純語が結びついて新たな語としての「複合語」が生み出される。この言語の変遷のなかでマラルメが重要視するのは「単純語」である。シュライヒャーの唱えた言語の進化論であれば、すべての言語は単音節、膠着語、屈折と段階を経ることになり、世界中の言語はその進化のどこかに位置づけられることになる。つまりマラルメは「単純語」をこの単音節の最も古い言語形態を残している語と考えている。英語は最も古い言語の形態を現在の語彙の中に温存している言語と捉えていることになる[20)]。

---

come」の誤記である。なおこのチョーサーの詩句に関してもジョン・アールの前掲書の89ページで引用されている。ここでの記述も「I say the woful day fatal is come」である。

20） 英語が単音節的な言語であるという認識は、この当時の言語学者のあいだではある程度共有されていた考えである。たとえばオブラックは言語は単音節、膠着語、屈折語と進化し、高度に発展した後、単純化の道を取ることになり、再び単音節化し、言語の進化論は一種の円環を描くことを唱えたが、

こうしてマラルメは自分が特権的に扱う英語の単語群、すなわち単純語にたどり着く。しかしここで終わらない。かつて「語を経て〈文〉から〈文字〉に至ること」[21] と書いたマラルメの微分的な思考がこのアングロ＝サクソン語の単純語で終わるわけはないのである。マラルメは「sneer は意地の悪い笑いであり、snake は背徳的な動物である。それ故に SN は英語の読者に不吉な二文字であるという印象を与える。ただし snow は例外だが、等々」[22] と語の分解を始める。マラルメは語を分解し、語根を導き出し、さらには語根を形成する文字の分析にまで進んでいく。しかもマラルメは単語をアングロ＝サクソン語、ノルマン語、外国語と分類・序列化したように、この文字に関しても重要度に応じて、序列化しようとする。まずマラルメは「冒頭の文字に母音が来る語がもともとの英語、すなわちアングロ＝サクソン語を基盤にしたものには何と少ないことか、よく知っているはず。『北方』の言語では語の出だしは主として子音である」[23] と語頭の母音の少なさを指摘する。それを生物学的な比喩でもって「母音と二重母音」は「肉」のようであり、「子音」は「解剖すべき繊細な骨格」[24] と表現する。この比喩は語の骨格にあるのは子音で、母音はその骨格の肉付け程度の役割しかなく、重要性はないということを意味する。また、「語中の母音あるいは二重母音は『北方』の言語ではさほど重要度は」[25] ないとしている。つまり母音、二重母音は語頭であろうと語中であろうと、発音する際の支え程度の役割しかなく、重要な役割を担っているのは主に子音なのである。しかし子音がすべて重要なわけではない。重要なのは少なくとも英語では語頭に位置する子音なのである。したがって「語末の子音は今でも判別できる接尾辞の状態に属し」[26] ていて、

この屈折語が単音節化した言語として英語を挙げている（A. Hovelaque: *La Linguistique Histoire naturelle du langage*, Scheicher Frères, sans date）。

21）*O.C.* I, p. 508.

22）*O.C.* II, p. 968

23）*ibid.,* p. 970.

24）*ibid.,* p. 949.

25）*ibid.*

26）*ibid.*, p. 973.

重要度は低い。語頭の子音が重要なのは、それが語根を形成しているからだ。語根は多くの場合、子音の集まり（多くは二つあるいは三つの子音の集まりであることが言語学の成果から分かっている）であり、この語根が語の基本であり、そこには語と語とのあいだの秘密のつながりを明らかにしてくれる意味が隠されているとしている（「文字、往々にして子音の集まりが、［……］秘密の親類関係を認識させてくれるのである」[27]）。こうしてマラルメは語の階層を完成させる。子音と母音に区別し、母音には大きな重要性はないとして簡単に述べ、子音の重要性を強調する。しかしその子音にしても語末や語中の子音はやはり重要なものではないとして、読者の注意を語頭の子音の集合体、すなわち語根へと向けさせる。この点に関していえばマラルメは言語学の学問的な成果に則り、語根の文字の組み合わせを抽出しているといえる。

Ⅱ　語頭の子音

語頭の子音は確かに語根であるが、これをマラルメが重視するのは、そこに複数の語に共通する秘密のつながりが見出すからである。いくつかの単語は語根の持っている基本的な意味でつながっている。言い換えると共通の意味が語根にはある。語根にはこうした隠された意味がある。マラルメは語る。「意味作用が真に存するのはそこ、〈出だし〉のところであると付け加えておいてもよいだろう」[28]。そして「語頭の子音は変化することはない。というのも根源的／語根的な力、語の基礎となる意味のような何かが、そこに横たわっているからである」[29]。語根によって一見したところ関係のなさそうな語が密かなつながりを持っている。ちょうどこの語根はへその緒のようなもので、原初の基本的な意味と結びついていることになる。同じへその緒を持つ語は、派生の母胎となった文字、あるいはより原初的な子音の集合体のもとに集まってくる。それはまるで「この文字のもとに古代の父称のように語彙

27）*ibid.,* p. 1014.
28）*ibid.,* p. 973.
29）*ibid.,* p. 1016.

のグループが整列しにやってくる」[30] のである。だとすれば、この隠された意味、語根に従って単語を分類することは可能なのではないか。そうした仮説に立って行ったものがマラルメの単語の分類である。ともかくこのマラルメが作り、その後多くの識者が言及し、そして微笑みとも失笑ともつかぬものを口許に浮かべることになるリストを見てみよう。このリストは周知のように通常の辞書のようなアルファベット順の配列にはなっていない。まず母音と子音に分類し、母音から記述しているが、前述のように母音も二重母音も要するに特別な価値はなく、「注意すべき重要な傾向もない」[31] ものと断じ、あっさりと母音の話を締めくくってしまう。そして問題にするのは子音である。マラルメは子音を「唇音 *b*、*w* あるいは *v*、それから *p*、*f*。喉音 *g* と *j*、*c* あるいは *k* あるいは *q*、そして *ch*。歯音 *d* と *t* あるいは *th*。帯気音 *h*。流音 *l*、*r*、*m*、*n*」[32] の順番で分類していく。これら冒頭の子音とその次に来る文字との組み合わせがある種の基本的な意味を有しており、この共通の文字と意味を有するものをひとまとめにしていき、これをマラルメは「同族語」と名付けている。このようにして秘密の親類関係を有するいくつもの同族語のグループができあがる。これに対して「同族語」が表しているいずれの意味にも当てはまらず、単独で存在しているものを「孤立語」と呼んでいる。リストではこの「同族語」がまず掲げられる。「同族語」はさらに下位の二つの小グループから成る。まず「レギュレーター」とマラルメが名付ける基本語が掲げられ、それからそれに関連する語（関連語）が列挙されていく構成になっている。こうして二種類に階層化した単語のリストの後で、これらの子音の「主要な意味作用に関する考察」が続き、最後に「孤立語」が列挙される。このうちマラルメが「主要な意味作用」について説明した部分のいくつかを見てみよう。

B-B は多くの「語族」を供給する。そしてそれぞれの語の始まりのと

30）*ibid.*, p. 968.
31）*ibid.*, p. 973.
32）*ibid.*, p. 970.

ころですべての母音を従えることができるが、二重母音はわずかで、子音は *l* と *r* のみである。これは意味をうがってみると、多様であるがしかし秘密の内にすべてが結びついており、生産／出産、あるいは妊娠、豊穣さ、広がり。膨らみと撓み、ほら話を意味する。それから塊あるいは沸騰、時に善良さ、天恵を表す［……］。多かれ少なかれ基本的な唇音であることに伴う意味作用[33]。

G-G は（語の大多数を支配する文字ではないけれど）重要であり、この喉音は一番目の文字として常に硬音だが、母音が続くのであれ、子音が続くのであれ、まず精神が赴く地点への単純な憧れを意味する。その欲望は、*l* が続くことで満たされるかのようで、喜びや光などをこの流音でもって表現し、滑走の観念から植物的な成長あるいは別の形式を経て増加の観念へと移行することを加えておいていただきたい。最後に *r* と結びつくと、*l* をともなうことで欲しいと思った対象を捕まえたように、あるいはそれを砕き、粉々にする欲求が出てくるだろう[34]。

S-S はほとんど *r* と同様に子音のなかでは上位を希求するものである。［……］S は単独では「置く」「座る」あるいはまったく逆に「探す」といったはっきりした意味以外のものはほとんどない。ところで「分ける」という観念は平等のそれとそれほどかけ離れているわけではないが、それを別にすれば、（予想される）上記のものとは別の観念は（*sw* のような）*w* との結びつきによって初めて現れる。それは速さ、時として膨張、あるいは吸収といったものを表す。（*sc* のような）*c* との結びつき、それは分裂、散在、刈り込み、切り込み、揺れ、あるいは摩擦、断片、強い動揺であり、これらの最後のいくつかは（*sh* のような）*h* によってもたらされる。これはアングロ＝サクソン語での *sc* の変形である。*sh* は遠くに投げることをはっきりと表しているが、それ以上にしばしば、影、恥、遮蔽物、そして矛盾するようだが示す

33）*ibid.*, p. 976.
34）*ibid.*, p. 986.

行為も表す。このことから *s* 単独の見るという純粋かつ単純明快な行為に回帰するのである。*st* は多くの言語で安定、率直、焼き入れ、固さ、塊を表す組み合わせのひとつであり、関係する言語の類似性を示すことになる。最後におそらく *s* という文字の基本的な意味である「興奮」。*st* は力、希求、次いでさすらう、散布することを表現するために *r* を従えることさえある（*str* のように）。英語に特有なことで、ともかくフランス語、ラテン語、そして時にはギリシア語とさえ比べてみても、語頭が *sl*（*sr* は存在しない）、*sm*、*sn* のような純粋な舌音あるいは鼻音を伴った二つのもの、*sp* に *l* や *r* を伴ったような三つのものが現れる。*sc* と *sn* はとりわけフランス人によって拒絶されているが、英語でも天候の悪さの意味しか存在しない。一方では弱さ、臆病、傾斜、滑ることの観念、次いで突然、割る、あるいは罪の観念を表す。もう一方では蛇のように忍び寄る邪悪さ、罠、作り笑いを表している。よい感情はしばしば *sm* の組み合わせから現れる。そこには微笑や誠実な仕事が含まれる。あるいは *sp* の組み合わせは非常に繊細な仕事の観念を表している。残りははっきりした研ぎ澄まされた物体、何らかの正確な場所の意味の類である。最後に *spr* と *spl* は生まれ出るもの、広がるもの、展開するものの噴出の一つを証言している[35]。

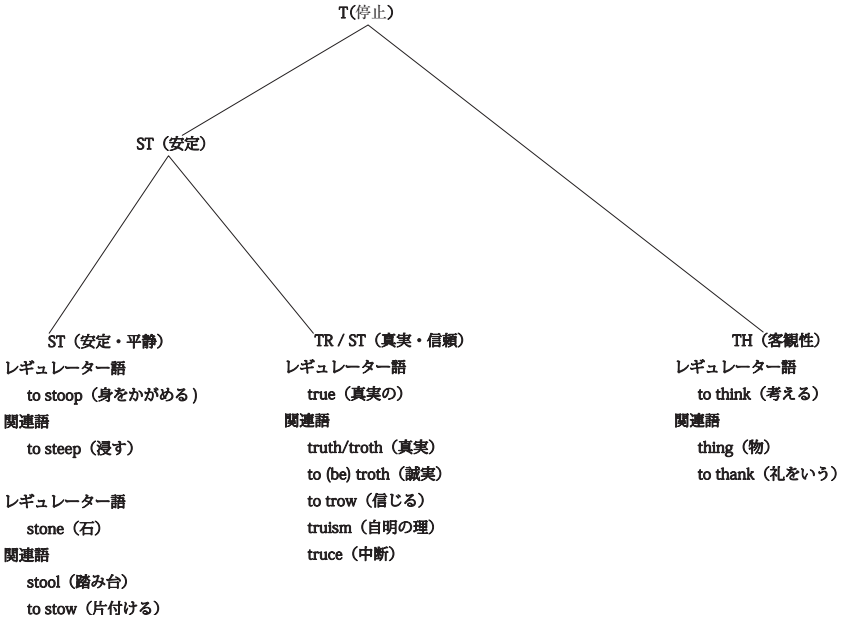
T-［……］この文字は何よりも停止を表し、この文字は母音、二重母音を従え、唯一の組み合わせとして *r* が現れるものが認められている。フランス語やラテン語ではかなり耳慣れないが、ギリシア語では知られている音である、硬子音あるいは軟子音である *th* は、英語ではかなり明確な意味を獲得している。すなわち客観性の意味合いである。事物、思考、君、すべての指示詞と冠詞はこの文字で始まる。安定と平静という基本的な意味は *st* という組み合わせによって見事に表現される（*s* を見よ）が、これは、*th* でもって十全に顕在している客観

35）*ibid.*, pp. 997–998.

> 性のあの観念によって実にしばしばここに還元されるのである。それゆえ、取る、作る、言う、あるいは結ぶや耕すといったようなさまざまな行為となるのである。*tr* は倫理の領域での安定の観念をもたらすので、一見したところ大きな違いはなく、真実と信頼のグループを形成することになる。最後にそれは足で踏みつけるの意味に達する[36)]。

マラルメはこうした記述をすべての子音に関して行っている。そしてわれわれはこの「主要な意味作用」の一覧を見て初めて、文字－語根－レギュレーター語－関連語の関係を推測できる。ここでは紙幅の関係ですべてを考察できないので、最も特徴的で図式的な記述になっている T の「主要な意味作用」を見て、マラルメが語に対してどのような構造化を施したのかを見ていこう。T は「停止」が「主要な意味作用」である。これが起源であり、「正しい」意味作用である。そこからひとつあるいは複数の文字が結びつき、語根が形成される。語根は子音の組み合わせとなるので、ここでは ST あるいは TH がそれにあたる。ST は「安定、平静」を、TH は「客観性」を表す。そしてここから「レギュレーター」となる語が続くことになる。ST には具体的な行為や物体が結びつき「安定、平静」を表す ST を語根に持つレギュレーター語、そして抽象的、あるいは倫理的なものと結びつき「真実、信頼」を表す TR あるいは ST を語根に持つレギュレーター語が従う。たとえば前者であれば、動詞の to stoop（身をかがめる）がレギュレーター語であり、関連語は to steep（浸す）である。あるいは名詞であれば stone（石）がレギュレーターであり、stool（踏み台）や to stow（片付ける）が関連語である等々。後者の TR あるいは ST を語根に持つレギュレーター語は、形容詞の true（真実の）であり、truth/troth（真実）、to (be) troth（誠実）、to trow（信じる）、truism（自明の理）、truce（中断）が関連語である。一方、「客観性」を表す TH は、レギュレーター語の to think（考える）が属し、そこから thing（物）、thank（礼を言う）という関連語が関連づけられる。こう

36）*ibid.,* pp. 1003–1004.



したことを可視的に表現しようとすると、上記のような図になるだろう。これはミションが作成したものにわれわれがやや手を加えたものであるが、アルファベットという文字を起源に一種の樹系図のようなものをすべての文字に対して作り上げることが可能であろう[37)]。

こうした一種の樹系図を作り上げてみると、誰しもが思うのはやはりマラルメはクラテュロス主義者ではないかということである[38)]。しかしもう少し

37）Michon, *op.cit.,* p. 125.

38）たとえばクローデルはマラルメをクラテュロス主義の中に位置づけようとしている。Paul Claudel : « L'Harmonie imitative» in *Œuvres en prose*, préface par Gaëtam Picon, édition établie et annotée par Jacques Petit et Charles Galpérine, Bibliothèque de Pléiade, Gallimard, 1965, pp. 95–110. 一方、こうしたことをマラルメの素人的な空想といわれてきた事実があるが、たとえばジャン・トゥルニエはイデオグラムという術語を作り、文字の意味を分析している。

落ち着いて考えてみよう、何がクラテュロス主義であるという思いを起こさせるのかと。プラトンにしたがえば、クラテュロスは、名は事物の持つ自然本性を反映していると主張していた。問題は名であり、名詞なのである。クラテュロスよりももう少し範囲を広げることが許されるなら、語が問題なのである。語は自然本性と対応していなければならないのである。しかしマラルメのリストには、ミションにならってわれわれが作り上げた樹系図には含まれない、多くの「孤立語」が存在している。あるいはすでに引用したように、SN が不吉なことだけを表象し、意味するのではなく、snow のような白さ、純潔さとも結びつくことにもなってしまう。こうしたことはクラテュロス主義では許されることではないはずだ。これではどこかで自然本性と語の対応関係で決定的な取り違えが起こってしまっていることになってしまう。

このことにやはり関心を示し、足を止めたのがジュネットである[39)]。ジュネットはこの語の意味が複数存在し、中には誤りがあることをそうだと肯定した上で、クラテュロス主義との整合性をつけようとする。まずジュネットは文字、アルファベット、あるいは音素のレベルでは常に正しさが維持できていたものの、語になってしまうと背かれ、裏切られてしまうという関係を提示する。そして文字と世界の光景とを結ぶ絆があるというクラテュロス主義の前提を提示した上で、この絆を「分析するのは、科学が、これまで地上で話されてきた個々の言語の膨大な目録を手に入れ、すべての時代を通覧するアルファベットの文字の歴史を記述し、語の創造者である人間がときに見抜き、ときに見誤ったそれらの意味の絶対的な意味作用がおおよそどのようなものであったかを書きとめる日が到来するまで待つしかないだろう」［傍点引用者強調］[40)] というマラルメの一節を引用する。言語の創始者が見誤ったものがあるのだ。つまり正確に事物と対応していない語が存在するということだ。それが言語の誤り、欠陥につながっていく。言語の「絶対的な意味作用」は確かに文字には存在し、これはいわば自然本性に基づいたものなのだ。しかし言語の創始者の誤りによって文字を組み合わせて作られた「現実

39）Gérard Genette : *Mimologiques,* Seuil, 1976, pp. 298–306.
40）*O.C.* II, p. 968.

の語彙体系に含まれる語はこの意味作用に背くことがある」[41] のである。アルファベット、文字、音素の次元では「正しさ」が保たれていたが、語になって正しさは見失われることもあるのである。「正しさ」とは正しい表象関係と考えられるなら、マラルメのクラテュロス主義は、語にあるのではなく、確かに文字のレベルで存在することになる。

こうして言語の創始者の誤りによって、言語は欠陥を抱え込んでいることになるのである。ここで後年、マラルメが「詩の危機」のなかで語る「昼［jour］」に「暗さ」が、「夜［nuit］」に「明るさ」が附加されてしまうという不可思議な一節を思い出してもよいだろう[42]。ここでは、暗さを連想させる［u］という「暗い母音」が「昼［jour］」に、逆に明るさを連想させる［ɥ］と［i］という「明るい母音」が「夜［nuit］」に配置されてしまうといった誤りが生じてしまっている。そしてこうした例は散見されるのである。しかし語を分解していくと、文字の持つ正しい意味作用があり、それを何らかの理由で取り間違えたが故に、語の欠陥が生じたことが分かるのである。語の次元では誤りを含んでいるものがあるにしても、正しい語は文字、とりわけ子音がその正統性を保証してくれているのである。つまり起源に文字と基本的な意味が君臨し、それが支配し、そして語の正しさを保証しているのである。

Ⅲ　観念の在処

ここでマラルメの英語という具体的な言語を通してみた言語観を整理しておこう。マラルメは現代の英語のうちアングロ＝サクソン語を起源とする語には、当時の言語学の言説では最も原初的な形態である単音節的要素を認めることができると述べている。この単音節的な要素を見て取れるのは、語頭の子音の組み合わせである。この語頭の子音の組み合わせが意味作用を有するのであるが、意味作用を引き起こすのは、語根を構成する文字、アルファベットである。それぞれの文字には文字特有の「主要な意味作用」があり、

41）Genette, *op. cit.,* p. 299.
42）*O.C.* II, p. 208.

これが語根の意味を生み出し、そこから語が形成されることになる。

ところでこの意味作用は、マラルメのテクストでは観念と重要な関係を持つことになる。そのことは1860年代末の「言語に関するノート」で明らかにヘーゲルの影響下にあると思われる一節、「〈言葉(ヴェルブ)〉は〈生成〉の「本質と同一の否定」である〈観念〉と〈時間〉を通して〈言語〉となる。／〈言語〉は〈言葉(ヴェルブ)〉、その観念が〈存在〉のなかで展開したもので、時間はその様態となる」[43] からうかがい知ることは可能だ。詳しく論じる余裕はないが、人間に対して超越的である〈言葉(ヴェルブ)〉は無限定なものであり、表現できないものであるので、それをあえて表現しようとすれば無でしかなく、その無から〈観念〉が生じるが、おそらくまだ形がなく、観念から文字が生まれ、語根となり、語となっていく。こうしてみると〈観念〉は無としか表現できない存在が展開したものであり、この〈観念〉こそ、言語の基礎となるような、あるいは原型となるようなものと考えられる。この考え方は、確かに理念的であるが、モデルとしては新プラトン主義の流出論に近いと思われる。そうだとすればマラルメが意識していたかいなかったかは別として、この〈観念〉は人間の外部に超越的にあるプラトンのイデアと重なることになる。このイデアは事物の範型であるといってよい。つまり事物の祖型・原型、あるいは設計図のようなものである。このイデアによって個物である個々人や個々の生物、事象が形作られるのである。

この1860年代末にマラルメが考えた言語観の一端が『英単語』に流れ込んできている。しかしそこには精神の危機の際のこのモデルと重なりあうように、アリストテレスの註解の伝統から生まれた記号－概念－事物というモデルも反映されているようだ。そのことを確認するためにもまずアリストテレスの「命題論」を考察する必要がある。

---

43) *O.C.* I, p. 506. ここで語られている〈言葉(ヴェルブ)〉はいうまでもないことだが、「ヨハネによる福音書」の冒頭の〈言葉(ヴェルブ)〉、すなわちロゴスと重ねあわせられている。マラルメがやや特異な点は、この言葉(ヴェルブ)＝ロゴスが、具体的な言語体系を有していないものであるという前提に立っていることである。

声に出して話される言葉は、魂において受動的に起こっているものの符号であり、書かれている言葉は、言葉に出して話される言葉の符号である。そして文字がすべての人にとって同じでないように、音声もすべての人にとって同じではない。これに対して、音声は第一に魂がもつ受動的なものの記号であるが、この受動的なものはすべての人にとって同じものである。また魂がもつ受動的なものは事物・事態の類似物であるが、事態・事物はもとよりすべての人にとって同じである[44)]。

現代のわれわれには馴染みにくい言い回しをやや分かりやすくパラフレーズすると次のようになるだろう[45)]。言葉には「声に出して話される言葉」と「書かれている言葉」と「魂において受動的に起こっていること」の三種類があることをアリストテレスは述べる。つまり語られていること、書かれていること、知性によって把握されていることである。言葉は知性によって把握されたものを意味表示し、この把握されたものは事物を意味表示することになる。人間は事物を直接把握することはできないので、事物を意味表示している知性によって把握されているものを介して言葉によって事物を把握する。そして「書かれている言葉」は、「声に出して話される言葉」を意味表示する。ところで言葉は声に出されるものであれ、書かれているものであれ、人間による取り決めであるので、民族が異なれば、異なってくることになる。しかし知性によって把握されるものは同一である。この知性によって把握されているものは事物・事態の類似物であるからである。事物は誰でも同じものと認識するからである。それは取り決めではなく、自然本性的な結びつきであるため、民族によって異なることはない自然的な意味表示である。だからこの事物・事態の類似性・同一性をもとに知性によって把握されるものは

44）アリストテレス「命題論」（早瀬篤訳）『アリストテレス全集第 1 巻』、岩波書店、2013 年、112 ページ

45）パラフレーズにあたっては以下を参照。山内志朗『普遍論争』、平凡社ライブラリー、平凡社、2008 年、130–131 ページ。本論は山内氏の複数の書物から大きな示唆を得ている。この場を借りて謝意を表したい。

すべての人に同じものになる。

この知性によって把握されるものが記号と事物を媒介していることになるが、この媒介は膨大なアリストテレス註解を生み出したスコラ哲学ではおおむね「概念」と考える共通認識ができあがる。たとえば「語は直接的には心の概念を意味表示し、概念が事物の似姿・似像となっている場合は、概念を介して事物そのものを意味表示する」[46] という表現から、アリストテレスの「命題論」に現れた記号論は中世に到り、記号－概念－事物という三項から成る図式に納まることが分かるだろう。実際、中世最大の哲学者であり、神学者であったトマス・アクィナスは「アリストテレスにとって音声が直接的に表示するこものは知性の概念であり、そしてそれらが媒介となって音声は事物を表示すると語るのが必然であったのである」と語っている。ところでこの概念はどこに存在したのだろうか。やはりトマスの言葉。「たとえば『人間』というこの名指し言葉が表示しているのは、個々の人間から抽象された人間本性である。それゆえ、それが個的人間を直接的に表示することはありえないのである。それゆえプラトン学派の人々は、人間という名指し言葉が離在する人間のイデアそのものを表示すると主張した」。プラトンはイデアを永遠で不滅な実在と考えていたといってよい。一方、アリストテレスは「こうしたイデアは［……］その抽象性によって実在的に自在するものではない」[47] としており、個々の事物から抽象された普遍をイデアと考えている。そしてこのイデアが概念にあたることになる。両者のイデアは実体か抽象かという点では対立するが、一方、ここに共通するのは、人間の外部にそ

46）Julius Pacius: *Aristotelis Stagiriate Peripaticorum Principis ORGANUM,* Hanover, 1623; reprit: Frankfurt / main, 1967, p. 98e. この箇所の訳文は山内前掲書『普遍論争』（131 ページ）で用いられたものを使用している。

47）S. Thomae Aquinatis : *In Aristotelis libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analysticorum Expositio*, cum textu ex recensione leonina, cura et sutudio P. Fr. Raymundi M.Spiazzi, Marinetti, Roma, 1964, p.10. 訳文に関してはトマス・アクィナス「命題論註解」［山本耕平訳］（『中世思想原典集成 14　トマス・アクィナス』、平凡社、1993 年、p.226）を参照し、必要に応じ訳語を一部変更した。

れらが共にある点である。つまり人間に対して、イデアや普遍は超越的に存在していることである。

もちろん一口に中世のスコラ哲学といっても、そこには複雑で精緻な議論があり、解釈もまた多岐にわたるのでひとくくりにすることはできないのは勿論だが、記号－概念－事物という三項があり、概念が超越的に存在していたということは広く受け入れられていたといってよい。この記号と概念と事物の関係が崩れる時期がやがて訪れることになる。ミシェル・フーコーに従えば、この断絶はデカルトが起こした革命である。デカルトは「観念」という語を概念とは別に使用し始める。この観念の特徴をデカルト自身の言葉から探ってみよう。「第三省察」で彼は「私が肯定し、それを信じる習慣から明晰に認識していると思っていたが、実はそれを本当に認識していなかったというものがあった」と自分の誤りを告白し、「何ものかが私の外にあり、そこからその観念が送り出され、そして観念はそれ［＝事物］にまったく似ている、ということである」[48] ことが誤謬であったと語る。ここでデカルトが語る「観念」は、私の外にある何ものかと似ているということからするとあの「概念」にあたることが分かる。私の外にある何かからその「観念が送り出される」といっている一節から観念が超越的に存在し、記号と事物との媒介となって、人間に認識を促す働きがある概念と類似したものであることになる。つまりこの文章はデカルトがイエズス会の名門校ラ・フレーシュ学院でならったであろう中世のスコラ哲学の大原則を否定していることになる。「観念」が超越的に存在することが誤った考えであることをデカルトは「第三省察」で執拗に述べている。ところでここでデカルトは何が誤っていると考えているのだろうか。デカルトが観念と呼んでいる概念の位置だ。デカルトによれば、観念は「意識が私の精神に現れること」[49] としているから、人間の精神の中にあり、人間の外部で超越的にあるものではないことになる。

この精神の内に在処がある観念であるが、確かにデカルトはこれを単純に

48）ルネ・デカルト『省察』（山田弘明訳）、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2006 年、59–60 ページ。

49）同書、59 ページ

事物の似姿である「概念」と同じものと考えているわけではないようである。両者が完全に一致するようであれば、何もわざわざ「観念」という語を持ち出す必要はないはずである。1641 年 7 月のメルセンヌ宛ての書簡でデカルトは「私は観念という語を想像力の内で形成された具体的な事物のただひとつの似姿に制限すると捉えられるような曖昧なものに決めつけることなく、用いたいのです」[50] と語り、観念＝事物の似姿という関係ではないことを述べている。そして次のように述べている。

> 私が「観念」という名で一般的に呼んでいるものは、私たちがある事柄の概念を把握する何がしかのやり方で、ある事柄の概念を把握する時、私の精神の内にあるもの全般のことなのです [51]。

これはどのようなことなのか。「私は把握することはできないが、ある仕方で思考によって触れることのできる」[52] ことが可能になることである。「把握する」とは似姿を思い浮かべることであるが、神のような似姿を思い描くことができないものもある。しかし「概念を把握する」ことで神の存在を考えることはできるようになる。つまり神の似姿を思い描けなくても神の観念を持つことができることになるのである。観念は何か実体のあるものの似姿なのではなく、実際に思い描くことのできないものも我々は想像し、認識することを可能にする思惟のことである。ここで問題となるのは、「観念」が精神の作用として考えられているということである。つまり思惟の結果、現れるものが観念なのである。そのことは次のデカルトの一節に端的に表れている。すなわち「観念は私の意識の様態であって、私の意識から借用された形相的実在性のほかには、どのような形相的実在性を自分からけっして要求しない」[53]。

50）*Œuvres de Descartes* III *Correspondance* III, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, J. Vrain, 1996, p. 393.

51）*ibid*., pp. 392–393.

52）デカルト、前掲書、82 ページ。

53）同書、67 ページ。

ここで質料形相論に立ち入ることはできないが、形相とは無規定の質料という何かに形を与える普遍であると単純化して考えると、質料という具体的な実体を構成することになるものがなくとも私の意識のなかで考えることができるものが形相的実存であり、それが観念なのである。ここで何が起こっているのだろうか。一つはおそらくはイデアに淵源を持つにしても、デカルトの観念は、イデア／概念のように超越的に外部にあるのではなく、人間精神の内側に取り込まれたものであること、もう一つはその観念がイデア／概念のような事物の似姿や設計図ではなく、精神の作用、すなわち思惟であり、その産物が観念となったことである[54]。

ここでデカルトを持ち出し、観念とそれ以前の概念のあり方との比較を略述したのは、精神の危機の時代と呼ばれる 1860 年代末に計画した言語学の学位論文の草稿メモでマラルメがデカルトへ言及しているからだ。そのデカルト的な、あるいはデカルト以降の思考の構造では、観念は精神、言い換えれば人間の内部に属する問題である。そしてマラルメもそのことに共鳴していると思われるのは、「人間は意志に還元される」[55] と語っているからである。神のような超越的なものに人間が還元されるのではなく、意志という人間の内面に還元されるとする精神の構造はデカルトのそれに通じる。そうであればマラルメの思考は、デカルト以前のスコラ哲学的な思考、すなわち概念は精神の外部にあるとする思考とは本質的に相容れない。マラルメは確かにデカルトを読み、デカルトが路線を敷いた近代的な思考の末端に属していたのであれば、やはり精神に観念が内在していると考えているはずだ。

ところがここで『英単語』に戻って、語頭の子音から導き出されるアルファベットの分析をもう一度見ていると、それはむしろデカルト以前の精神

54）このデカルトを裁断線にして、idée の在り方を検討したのは、ロジャー・アリューの「デカルト以前以降の観念」（Roger Ariew : «Ideas, before and after Descartes » in *Descartes among the Scholastics*, Brill, Leiden Boston, 2011）である。また山内志朗『誤訳の哲学』でも詳しく触れられている。なおパノフスキーの『イデア』では、この裁断線は 16 世紀に設定されているのは興味深い差異である。

55）*O.C.* I. p.504.

の外部に概念が存在するモデルに従っているように見える。あの語の樹系図を思い出してみよう。現在使用されている語から語根を抽出し、さらに語根を形成するアルファベットにまで遡行していく。逆の見方をすると新プラトン主義の流出論さながらにいかなる言語の形を取っていない何ものかという存在から「停止」という概念が生じ、それがTという文字に結実し、やがてSTなど語根を形成し、それをもとにして単語となる。そしてこの「停止」の概念はあくまで人間の精神から独立したものであり、そのため言語自体が人間から自律して存在しうるものとなり、超越的に言語を支配している。

この人間精神の外に概念があるという図式をマラルメが抱いていたであろうことは、『英単語』の畳韻法について語っている箇所から類推できる。

> 詩人あるいは賢明な散文作家でもよいが、彼らの役割は、優れた、そして自由な本能でもって、語と語とを近づけることなのである。語と語はまるでお互いにかけ離れた遠方からたまたまやってきたかのようであればあるほど、巧みに組み合わされ、言語の魅力と音楽性とが一致するようになる。それこそ北方の精髄に内在し、多くの名詩がたくさんの例を示しているあの技法である。すなわち畳韻法である。このような「想像力」の見事な努力は、世界の光景のなかで輝く象徴で満足するだけでなく、世界の光景とそれを表現することを担っている言葉との間に絆を確立することでもあるが、それは言語の神聖で危険な神秘の一つに手をつけることになる[56)]。

畳韻法は特定の音素が反復されることで、詩の意味とは別に何かを喚起して詩的効果を挙げるものである。「あらわれ」や「エロディアード　古序曲」で［a］や［ɔ］音の繰り返しで、赤や明るさを喚起させようとしてきたマラルメからすると畳韻法は特権的な詩的技法であり、これが「効果の詩学」と関連することは確かではあるが、ここで問題にしたいのは、畳韻法が露呈し

56）*O.C.* I. pp. 967–968.

ているものである。「世界の光景」という事物と「言葉」のあいだを結ぶ媒介として「想像力」があることを畳韻法は明らかにするのである。

これはアリストテレスの「命題論」以来の記号－概念－事物の基本構造を彷彿させる言い方だ。つまりマラルメは精神から自律した概念にあたる「想像力」が、語と世界を媒介するものと考え、この「想像力」を介して世界の事物が意味表示されるとしているのだ。

ただ、ここには問題がある。マラルメがデカルト以前のモデルを抱いていたとして、ではなぜこの場でマラルメは「概念」という語を使わずに「想像力」といっているのだろうか。古代人の一節ではないが「模倣は自分の見たものしか表現できないが、想像は見なかったものをも表現できる」[57] からだろうか。だとすると、この「想像力」は概念と異なり、事物・事態の範型でも類似でもないものをも現前させることが可能になってしまうのではないだろうか。つまり似姿を想像できないものまでも想起できるようになってしまうのである。もしそうだとすれば、概念と事物のあいだの必然的で、直観的に捉えられてきた自然本性的な表象の関係が崩壊してしまうことにならないだろうか。いや、そもそも想像とは精神に内在する作用であり、そうであればむしろデカルトの観念に通じるものなのではないだろうか。マラルメが「想像力」という語を選択したことで、基本的な構造は記号－概念－事物でありながら、概念が事物の範型、あるいは類似物であるという定義を逸脱する可能性が出てしまっているのである。

ところでマラルメはこの「想像力」の媒介作用のことを「言語の神聖で危険な神秘の一つ」と表現している。最後にこの言語の「神秘」と「想像力」を考えてみよう。

Ⅳ　「正しさ」の行方

もう一度、マラルメの「主要な意味作用」に戻って考えてみよう。T の基本的な意味は「停止」である。この文字の表す、いわばアルファベットの「絶対

57）E. パノフスキー『イデア』（中森義宗・野田保之・佐藤三郎訳）、思索社、昭和 57 年、p. 24

的な意味作用」に接して誰しもが感じるのは一種の居心地の悪さであろう。何か曰く言い難い不安定な印象、一種の脆さ、危うさ、そして怪しさを感じる。この居心地の悪さは恐らく次のような問いに結実するだろう。「なるほどTは『止まる』を意味しているというのは受け入れよう、しかしその根拠はどこにあるのか」。絶対的な意味を持つ文字は単語を支配し、秩序づけ、さらには単語の意味の正しさを保証し、担保してくれるのだが、マラルメが語るアルファベットの意味作用の正しさそのものはどうやって保証されるのか。この正しさの担保はどこにあるのか。マラルメはアングロ＝サクソン語の語形成について述べているなかで、いささか唐突にオノマトペについて語り出す。

> ある語の意味作用と形態があまりにも完璧に結びついているので、精神にも耳にも見事だという印象しかひき起こさないような結びつき、そういったものがしばしば見受けられる。「オノマトペ」と呼ばれているものはとりわけそうだ。人をなるほどと唸らせ、真っ正直なこれらの語はその言語の他の語に比べて（ゴート語のWRITH以来、ペンのひっかく音を模したto writeのような語は別にして）劣った状態にある。なぜか。大昔からの貴族のような肩書きを持たず、数世紀を経た後でも、こうした語は何らかの語族に属すわけでもなく、昨日誕生したかのように現れるからだ。あなたの起源は、と問うてみてもそうした語は自らの正しさしか示さない。しかしだからといって彼らを侮辱してはならない。彼らは英語のなかにおそらくは最も早く現れた創造の手段を保持しているのだから。これら後発の語は、言語を語族に分類しようとする者をいささか当惑させる。実際、彼らはいかなる族にも属さないのだから[58]。

ここでマラルメのオノマトペの位置づけを見てみよう。マラルメはオノマトペを「意味作用」とそれを表す「形態」があまりにも見事に結びついたものとしているが、問題にしたいのは、これを「劣った状態」として語っている

58）*O.C.* II. p. 967.

以降の文章である。確かにオノマトペを言語的な劣位に置く思想は、言語学以前の言語の探求・夢想の時代から続く伝統的な思考である[59]。そうしたオノマトペ解釈の伝統に位置づけることは可能だろう。だからこの点に関してマラルメは独創的なことをいっているわけではない。このマラルメの語るオノマトペの特異さは、言語的に劣っているという点にあるのではなく、歴史を有していないという点にある。マラルメはそれを「大昔からの貴族のような肩書きを持たず」と表現している。要するにあの樹系図が作れないのである。語の正しさを証明し、保証してくれる「貴族のような肩書き」となる紋章、つまり起源である文字とその概念をオノマトペは持たないのである。他の語は歴とした家系図を持ち、己の由緒正しさを証明している。つまり起源を有しているのである。それに比べてオノマトペは出自のはっきりしないものなのである。そのためオノマトペは起源を問われても答えられない。オノマトペは自らの正統性を保証してくれる起源のアルファベットを有していないので、いかなる族にも属さないし、属せない。ところで樹系図がないということは、歴史がないことを意味し、起源がないということになるが、見方を変えると、オノマトペそれ自体が起源であるということになる。そのためオノマトペは「昨日誕生したかのように現れる」しかないのである。それ自体が起源であるためである。だから「あなたの起源は、と問うてみてもそうした語は自らの正しさしか示さない」。しかし「自らの正しさ」しか示さないということは、起源を問うなと問いそのものを拒絶し、正しさしか押しつけてこないことである。それ以上遡上することのできる歴史がなく、祖先がいない故に、自らが起源となり、自らの正しさを保証するのは、自身でしかなく、その自己肯定に疑義の念を挟んではならないのだ。要するに起源とは自らを保証してくれるものが実は自己以外にはないのである。

59）たとえばド・ブロスも同じようにオノマトペは、原始の言葉であるが、世界をすべて音だけで表現するには限界があるとして、言語的に劣っているといった主張を行っている (Charles de Brosses : *Traité de la formation méchanique des langues, et des principes physiques de l'étymologie*, tome premier, chez Saillant, Vincent et Desaint, Paris, 1765 を参照)。

オノマトペが正統性を持たないにもかかわらず、正しいのは起源に位置づけられるからだ。起源に位置するものは自己以外から保証を得ることはできない。これが起源に位置づけられたものの特性なら、同じように起源に位置づけられている文字についてもいえることなのではないだろうか。あの系統樹が示しているように最初の一点、「絶対的な意味」を持つ文字だ。文字は語の頂点にあり、そこから語が生じる起源であるなら、文字はそれ以上遡れる歴史は有さない。それは己の正統性を保証してくれるものを有さないことでもある。これは矛盾ではないだろうか。一方的に自らの正しさしか押しつけてこず、起源にあるはずの世界の事物との類似関係の必然性は問うなと起源に位置する文字やオノマトペは主張しているのである。それは必然性を証明することができないからだ。そう考えた場合、根拠のない文字とそこから現れる概念がすべてを支配し、秩序づけていることになる。無条件に正しさのみを押しつけてくる文字の概念が起源なのだが、この絶対的な意味は必然でも絶対でもないなら、置き換えることも可能になってしまう。

ここでもう一度、デカルトに登場してもらおう。マラルメのあの学位論文執筆のためのメモ群のなかに「虚構」という語が登場する。この「虚構」はマラルメ研究の伝統ではデカルトに帰せられるとされてきた。「虚構」が書かれているメモにはなるほどデカルトという名前は一度も出てこないが、断片の末尾に「方法に関する叙説」という記述があることからデカルトに関連づけられてきたに過ぎない[60)]。しかし確かにこの「虚構」はデカルトに淵源を求めて問題はないだろう。いやむしろあの外部に超越的に存在していたイデア／概念を精神の内側に取り込んだ知に還元した方が正確かもしれない。いずれにしてもマラルメの「虚構」は、デカルトに関わっている。もちろんわれわれはデカルトが『方法叙説』で「虚構」という語を使用していないことを知っている。もっとも第４部の「それまでに自分の精神に入り込んでいたものはすべて、私の夢の幻以上のものではないと仮構することにしました」[61)] と、「仮構する」という動詞は使用している。しかしもしこの記述に従

60）*O.C.* I, p. 504.

61）*Œuvres de Descartes* VI *Discours de la méthode & essais*, publiées par

えば、虚構は虚偽に通じるものになってしまう。そして実際、デカルトは虚偽の意味で虚構を使用していることも事実だ。だがデカルトは必ずしも虚偽の意でだけで虚構を用いているわけではない。虚構とは精神の内で起こる作用、つまりあの観念のことなのである。デカルトが直接的に「虚構」を定義づけたものはないが、デカルトが裁断したはずの中世に生を受けたオッカムが唱えた虚構体からデカルトへの系譜を考えてみると、デカルトが虚構と観念を重ねあわせていることが見えてくる。ここではオッカムその人ではなく、シャルペが簡潔に定義したオッカムの理論解説の一節を引用しよう。「オッカムによれば、それ［＝知解作用］は精神によって仮構された或る志向的存在と言うこともできる」[62)]。「仮構する」こと、すなわち「虚構」は知性・精神によって構成されたものであり、何らかの形で像を結んだものである。この真であるか否かはまだ判然としていないながらも像を結ぶことを「志向的」という。「志向的存在」とは思惟して得られた像ということになろう。精神内部でこのような作用を引き起こすことをデカルトは「観念」と呼んでいる。たとえばデカルトは観念の作用について山羊を想像することもキマイラを想像することもともに観念の観点に立てば真であるといっている。これが「精神によって仮構された」ものということができるだろう。つまり虚構とは精神のうちに事物を現前させる観念の作用のことなのである。

マラルメにあってはデカルトの観念の作用とこの虚構とは密接に結びついている。そしてマラルメはこの精神の内部での虚構の作用の結果、生じたものがあたかもイデアのように超越的に君臨することになると考えているのではないだろうか。この超越的にあるもののことをマラルメは観念と呼んでいるようだ。超越的なイデア、すなわち観念は事後的に生じるものであるが、ひとたび成立するとそれは絶対的なものに一変し、正しさを問うことは禁じられる。しかし「世界と言葉のあいだの生き生きとした『絆』も言語のなかに与えられ

Charles Adam et Paul Tannery, J. Vrain, 1996, p. 32.

62）Johannes Sharpe : *Quaestio super universalia*, a cura di Alessandro D. Conti, Leo S. editore, Firenze, 1990, p. 55. 訳文は山内志朗『誤訳の哲学』、青土社、2013 年、273 ページ）。

ていたものではない」。[63] この世界と言葉のあいだの絆に必然性はなく、いわば無からの創造であり、そこには飛躍がある。なぜならば言葉と事物の絆であり、語を支配する観念は語に先立って最初から起源にあったのではなく、後から起源に措定されたものなのである。この精神の内部で、事後的に語に先行するものを構築することをマラルメは虚構と考えていたといえる。しかしその創造がひとたびなされると、それが事後的に作られたことは忘れ去られ、絶対的なものになってしまう。つまりそれが精神の内側で生じた観念の作用の結果であることは忘却されてしまい、あたかも永遠に超越的に存在してきたかのようになるのである。ところでここでマラルメが「観念」や「概念」ではなく「想像力」を用いた理由の一端が明らかになってくるだろう。精神内部の想像力の活動によって概念＝観念が生み出され、それが超越的にあり、記号と事物を媒介することになる。つまり一見したところ、人知の及ばない超越的なものとして観念があるのではなく、それは人間の知性の働きによって生じたものであり、別のものに置き換え可能であることを示唆しているのである。

ところでマラルメが書いている「言語の神聖で危険な神秘」で用いられている「神秘」という語を一度、語源にまで投げ返してみよう。「神秘」という語は古代ギリシアの密儀宗教の秘儀を表すミュステーリオンが、後にキリスト教に取り入れられ、ミュスティクスという形容詞で広く用いられることになったものである。目や耳を閉じることが語源であったこの語は、中世のキリスト教の神秘神学になると言葉では表現できない、あるいは言葉を絶した体験における人間と神的なものとの一体化、法悦、エクスタシスの経験、あるいは信仰の実践となる[64]。神は人間の感覚も知性をも超えたものであるので、人間の知性の営みをどんなに繰り返しても神に近づくことができても、神と合一することはできない。そこで人間の知性の活動を停止させ、神との

63）Genette, *op. cit.,* p. 299.

64）山内志朗「言葉と神秘主義の関係」、『イスラーム哲学とキリスト教中世Ⅲ神秘哲学』（竹内政孝・山内志朗編）、岩波書店、2012 年、及び竹内政孝・山内志朗「神秘主義とは何か」竹内・山内前掲書を参照。

合一を可能にしようとするのが神秘神学である[65)]。そのとき何が起こっているかを考えよう。そこでは神の絶対性を無条件に受け入れ、神とは何かという問いが一切抑圧されているのである。われわれの世界は神によって秩序づけられ、神によってその存在を保証してもらっているが、起源に位置する神の正しさ、存在を保証するものは自分以外にはないのである。恍惚のうちに合一することは、自らも一者の一部となることであり、そこには自他の区分がなくなり、批判的に世界を捉える問いが封殺されることになる。

マラルメがここで「言語の神聖で危険な神秘の一つ」といっている「神秘」は、むろん中世で用いられた神学的な意味とは異なっていると考えた方がよいかもしれない。しかしそこには理知を超える起源・超越者に対する問いを封じるニュアンスが含まれていることもまた確かである。つまり言語の神秘とは、その語を秩序づけている文字の有する観念の根拠と正しさについての問いを封殺することなのである。文字の観念は語の頂点に位置している。しかしその文字を根拠づけているものはない。だから本来的には観念は虚構であり、他のものと交換可能なのである。しかしそのことを忘却させ、それが絶対であると思わせることこそ「神秘」なのである。マラルメは「言語の神聖で危険な神秘の一つに手をつけることになる」と言っている。つまり言語の起源の超越的な一点から作り出される絶対的な空間が虚構であり、そのため起源にある絶対的な意味は置き換え可能であることを意識することはなるほど危険であり、それを利用することが「手をつけること」すなわち文学ということになろう。

65）この点についてディオニュシオスの記述を参照してみよう。「神秘なる観想の対象に対して真剣に取り組むために、感覚作用と知性活動を捨て去り、感覚と知性で捉えうる一切のものを捨て去り、あらゆる非存在と存在を捨て去りなさい。そして、できる限り、あらゆる存在と知識を超えている合一へ無知によって昇りなさい」（ディオニュシオス・アレオパギテス「神秘神学」［今義博訳］、『中世思想原典集成 3　後期ギリシア教父・ビザンティン思想』、平凡社、1994 年、449 ページ）。

V「言語の二重状態」へ

マラルメはデカルトを読んだと考えられてきたし、おそらく読んだであろう。しかしマラルメは観念に関してデカルトのようなエコノミーな考え方をしない。むしろ複雑にしている。というのもマラルメは「観念」がイデアのように超越的に存在するという図式を捨て去らないからである。しかしデカルト以前のように、問うことが許されない絶対的な一点としてそれがあるのではなく、精神の作用の結果として生まれた観念が、事後的に起源になるのである。それが絶対であり得るのは、観念が事後的であることは忘却されるからだ。このことは「詩の危機」の「言語の二重状態」にも表れている。

> 現代の否定できない欲望とは、異なる権限を目指すかのように言葉の二重状態、すなわち一方には生の直接的な状態、もう一方には本質的な状態に分けるということなのである[66]。

この二つの状態は、それぞれ異なる言語体系として存在しているのではなく、言語の二つの状態と考えるべきだ。そして「生の直接的な状態」は「物語ったり、指示したり、さらには描写すること」さえも含まれてしまうことから、人間の言語活動すべてのことと考えられる。マラルメはこれを「報道」と一言でまとめているが、これは「文学を除いて、現代のさまざまなジャンルの書き物すべてが、この性質を帯びている」[67]ものなのである。そのためもう一方の「本質的な状態」は、日常の言語活動の何らかの側面を指していることではなくなる。つまりこの「本質的な状態」にあてがわれる言語活動、言語の作用は存在しないことになり、これは無ということになる。この無こそ「文学」なのである。ところが言語活動、つまり「生で直接的な状態」における活動を行うことで次のようなことが起こる。

66）*O.C.* II, p. 677.
67）*ibid*., p. 678.

私が「花！」という。すると私のその声がいかなる輪郭をも追いやる忘却の外で、それまで知られていた夢とは別のなにものかとして、あらゆる花束から不在の花が、明るい、あるいは高々とそびえ立つ観念そのものである花が、音楽的に立ち上がるのである[68)]。

このあまりに有名な一節は、イデアのような観念について述べている。この「花」の観念／イデアはいかなる個物としての個々の咲き誇っている花ではなく、普遍としての花である。これが個々の花々を超越してあることが語れている。しかしここで個物の花と観念／イデアとして花の関係をやや詳しく見ておくと、「花！」というと「花」という観念が立ち上がるとマラルメはいう。つまり言語活動の結果、事後的に観念／イデアが立ち現れるのである。花々に先行し、超越するイデアを個々の花が分有しているわけではないのである。「花！」といった後になって、初めていかなる花でもない花が普遍的観念として現れるのである。あくまでも言語活動の方が観念よりも先行しているのである。言語活動の「生で直接的な状態」に便乗している空の「本質的な状態」のところに観念が言語活動の結果、滑り込んできて、立ち上がるのである。すると「花」の観念は「高々と」超越的に聳え立つのである。これが詩であり、文学なのである。『英単語』はそうした意味からすると、「不在の花束」につながる言語の構成を明らかにしているということになるだろう。

68）*ibid*., p. 678.